

死をどのように考えてきたのか⑩

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

中村元氏は自ら著した『佛教語大辞典』の「死」の項目の中で、「東洋人は、死に徹することを通して人生を積極的に生きるという人生観を共通してもっていた」と解説しました。西洋の思想的源泉とも言えるキリスト教では、死は生命の終わりであり、死の世界に連れていかれるという旧約聖書の死の意味を前提にしながらも、その死の恐怖はイエスの贖罪の死という教えによって、復活の信仰となっていきました。それは、イエスに繋がることによって、死の恐怖が死後の永遠の命へと変わることでありました。

このように宗教は、それぞれの死生観を提示し、それによって生きている私たち人間の生き方を指し示してきました。宗教それぞれが依拠する文化や社会、地理的環境や歴史という背景を反映しつつも、普遍的な観念あるいは教説となっています。死は、人間の生き方を変えることができるほどに、人間にとっては究極の出来事であることがわかります。

一方、科学の著しい発展など、人々は死がまるでないかのように思うようになっていたことはこの連載の初期で紹介しました。個人的にはどうであれ、近代化されていった社会の中で、死は遠ざけられ、語られなくなっていた状況がありました。

『死を考える事典』

2001年、『死を考える事典』（原題は *Encyclopedia of Death and Dying*）を編んだグレニス・ハワースとオリヴァー・リーマンは、序を次のように始めています。

19世紀末のことである。ジョセフ・ジェイコブズは、死がすたれようとしている、と述べた（1899）。ふたつの世界大戦が起こり、膨大な数の死者が出た。それにもかかわらず、多くの社会では、「死者 (mortality)」を語りたがらない傾向が次第に見られるようになった。これが20世紀の生の特徴であったように思える。しかし、21世紀になると、「死 (death)」と「臨終 (dying)」という問題への関心が次第に高まりを見せ、死をめぐるタブーは着実に解消されてきた。（中略）実際、死と臨終のあり方、あるいはそういった事実そのものが文化の源であり、生という「織物」に直接関係する、という認識が生じてきた。本書に収録された多岐にわたる項目を見て、「死去」が社会習慣と社会関係のあり方と意味を形成していること、そしてそのことが人間存在の公的・私的領域のあらゆる分野においての「死去」が持つ意義に反映している、と読者の方々は認識されることだろう。（グレニス・ハワース、オリヴァー・リーマン編、荒木正純監訳『死を考える事典』東洋書林、2007年、p.i）

ハワースとリーマンが述べるように、死そして臨終およびそのあり方や事実が文化の源であるなら、20世紀の生の特徴であった「死者を語りたがらない」という傾向が、21世紀に入って、死と臨終への関心として、高まりを見せることは不思議ではないのかもしれませんが。それは20世紀の反省であるかもしれませんが、諸科学の目指している方向性のひとつが、死や臨終への関心へと向かっているということかもしれません。ハワースとリーマンのふたりは、ふたたび死や臨終が人々の関心

事になった、その要因について、次の6点を挙げています。

- ① 今日、死と臨終のすべての側面に取り組んだ学問的・一般的文献が豊富にあり、そうした文献は直接的な説明から学問的研究にまで及んでいる。
- ② いくつかの専門集団が、「死去」や死の教育にかかわる話題に専門的な取り組みをみせている。
- ③ ホスピス運動の発生と成長によって、死と臨終がケアをめぐる言説にしっかりと位置付けられた。
- ④ こうした問題によって、専門家と素人が結びつけられた。
- ⑤ 死後の儀式をめぐる形成された産業の存在。
- ⑥ 多種多様な装いの死を主要な焦点とするメディア・娯楽産業の存在。（同書、pp.i～ii）

こうしたことを背景として、ふたりの編者は、死について400余の項目を立て、諸学を横断するようなかたちで解説していきますが、それはそのまま死をめぐる問題を私たちに提供しているともいえます。

たとえば、「死の定義」という項目の中で、死とは何であるか、何をもって死としたかについては、諸論があつて、その定義には変化があるとした上で、「死の定義に変化を生じさせるのは技術面の変化それ自体ではない。技術の変化とそれに対する社会の反応（受容にせよ拒否にせよ）の両方が絡んで、定義を変化させる」（同書、p.278）と述べられています。つまりは、社会の死の受容のあり方は、死の定義に強く反映されるということになります。それは、死の定義に反映された死をめぐる文化であり、また、残された者が死をどのように受けとめていくのかということに関係しているということでしょう。

不平等な死

死はどんな生者にも訪れるものですが、その状況は個々の事実として現れてきます。突然の死や不条理な死は、いつも「なぜ」という思いを想起させます。そして、その死を受容することは、それが「死」そのものであつたとしても、遺された者にとって非常に困難なものとなります。こうした死や死者を思うと、その死についての何らかの説明や解釈を求めたくなります。古来宗教は死や死後の世界（または死の意味）を語ってきましたが、それは人がより良く生きるためだったのでしょう。時として不条理な死を迎えた者は、通常とは異なる仕方であつてきたこともありましたが、しかし、それも遺された生者が生きていくのに必要であると考えられたからかもしれません。

死者と生者。そのかわり方から、死の受容の在り様を考えてみるとどうなるでしょう。死の定義が変化してきた以上の変化があつたのでしょうか。

そもそも、なぜ、人は葬送儀礼を行うのでしょうか。そこに現れる文化的差異は何を物語るのでしょうか。その時、社会あるいはコミュニティはどうかかわってくるのでしょうか。

たとえば、「孤独死」がメディアで取り上げられるとき、私たちはその事実をどのように変えていきたいと思っているのでしょうか。長寿という言葉と高齢社会という言葉の用い方に違いがあるように、死に方の違いは社会的な課題として提示されているのでしょうか。